古代史シリーズ2

「古事記と日本文化」

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

記紀による日本の歴史は高天原の神話の世界、天孫降臨から始まる天皇の国家づくり、大和朝廷から奈良までの経緯を神々と天皇の施策で記述されています。記紀を読み解くには、この流れを把握することが必須です。当冊子では主要な神々と天皇を取り上げ古代史の基本的な流れと神々と天皇の関係を理解します。記紀を読めるようになるための基礎知識に焦点を当てます。

著者：情報戦略モデル研究所

井上　正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前ITメーカーのSEやコンサルタントが専門でした二十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味が湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀(以降は「記紀」という)が読めなかったり、古代史は良く分からないと思われている初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれません。

また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元SEとしてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれません。

日本の文化は縄文時代(一万五千年前)から現代までの積み重ねで築かれている特徴がありますが、日本にいますとその文化が何かも意識しないで過ごしています。

古代史シリーズ2「古事記と日本文化」では、日本の神々から天皇への継承系譜を追い、後世に重要な文化的影響をもたらした天皇とその政事(まつりごと)を古事記・日本書紀から要約します。高天原からの3柱の天孫降臨、天皇の重大足跡、日本文化の基盤にある飛鳥・白鳳・天平時代の治政と文化を探ります。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

＋「世界と日本の見方」　松岡正剛　(春秋社)

＋「古事記」　竹田恒泰　(学研)、「日本書紀」　宇治谷孟(講談社)

＋「古代日本誕生の謎」　武光誠　(PHP)

＋「日本の歴史　本当は何がすごいのか」　田中英道著(扶桑者)

＋「海道東征」をゆく　(産経新聞社)　など

本冊子の古代史シリーズ2「古事記と日本文化」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

◎ 古代史シリーズ2 「古事記と日本文化」の目次 ◎

第一章 「日本の3つのパンテノン(神殿)」……4

高天原から降臨した3柱である日本の3つのパンテノン(神殿)と古代大和朝廷の繋がりは何か。出雲や日向の記紀での位置づけを掴みます。

第二章 「神と天皇」……21

大和朝廷から奈良時代までに大きな影響を与えた天皇の業績とその日本文化づくりの御心をおさえます。

第三章 「大和朝廷から飛鳥時代へ」……36

纒向遺跡(古代大和朝廷)から大和朝廷への文化の変遷、および仏教が導入された「飛鳥時代」の文化とその発展を支えた天皇の施政を取り上げます。

第四章 「白鳳・天平文化」……49

仏教が導入された「飛鳥時代」から仏教が花咲く「白鳳・天平」の文化とその発展を支えた天皇の施政を取り上げます。

第五章 「神武天皇」……64

大和朝廷を作った初代天皇である神武天皇。大和に君臨するまでの軌跡をたどります。

おわりに……80

◆第一章「日本の三つのパンテオン」の目次

第一話　神代の構造……5
高天原
葦原中国
黄泉の国

第二話　三つのパンテオン……7
日向パンテオン
出雲パンテオン
大和パンテオン

第三話　出雲伝説……10
出雲の遺跡
記紀が伝える国譲り物語

第四話　日向伝説……13
天孫降臨
日向の三代神

第五話　大和朝廷の誕生とその経緯……16
纒向遺跡と古代大和
大和朝廷への経緯

コラム:「天孫降臨の随伴神」……20

第一話　神代の構造

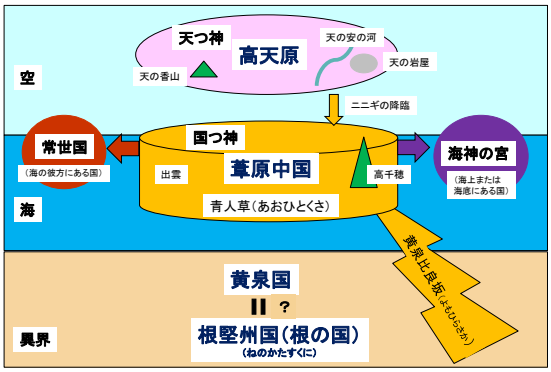
古事記では、最初に神々がおわします高天原の「神代の神話」の時代があり、その後に葦原中国（あしはらなかこく）に降臨した天皇の話に進みます。天皇期になりますと、高天原と直接関係する初代天皇になる神倭伊波礼毘古命（カムヤマトイワレビコノミコト：以降はイワレビコと記す）が東征し、橿原宮（かしはらぐう）を建て大和に居を構え神武天皇になります。その後は古代大和から始まり全国を統治して行く天皇紀です。つまり、葦原中国が大和に変わり天皇の統治の話に移っていきます。高天原世界の構造からみていきましょう。

神代の世界は、「空」、「海」、「異界（いかい）」で構成され、「空」には高天原があり、「海」には葦原中国があり、「異界」には黄泉国（よみのくに）があるという（参照資料 1-1）。

高天原は、アマテラスが統治する天の世界であり、そこには、天の香山（かぐやま）がそびえ、天の安の河が流れ、天の岩戸があり、多くの天つ神（あまつかみ）がいる。天つ神の中には、天の安（やす）の河原でのあらゆる軍議での助言者である知恵の神の思金神（オモイカネノカミ）を始め八百万（やおよろず）の神がいる。阿波国風土記逸文には、大和三山の一つである天の香具山は天から降ってきたという伝承があり、大和三山（参照資料 1-2）の中で最も神聖視される山である。高天原に対して地上には葦原中国がある。

葦原中国の「葦原」とは、葦が生い茂る未開の原野のことで海に浮いている。葦とは人間のことで青人草（あおひとくさ）と言う。十七世紀、パスカルが「人間は考える葦である」といいましたが、古事記が書かれて千年後でも同じことを考えたので

参照資料１－１：神代の構造：高天原と葦原中国



出典：「ゼロから知る「古事記」（Gakken）

参照資料１－２：大和三山

出典：ウィキペディア図柄引用

すね。「中国」とは、高天原の天上と地下世界「冥界(めいかい)」の中間にある国という意味です。ここには国つ神(くにつかみ)が居て、葦原中国の土地を領有しています。国つ神の中で一番大きな神は出雲の神です。この葦原中国が浮いている海には常世国(とこよのくに)と海神の宮(わたつみのみや)があり、葦原中国に繋がっています。さらに、葦原中国は黄泉比良坂(よもひらさか)を通して黄泉国(よみのくに)にもつながっています。この葦原中国は国つ神が所有していますが、この国は高天原が支配する国になります。

常世の国とは、海の彼方にある国です。国つ神を助けたり、葦原中国から消えて行く神の国です。中国、朝鮮やインドからの渡来人の神様を意識したのかもしれません。

もう一つの海神の宮(わたつみのみや)は、海上または海底にある国です。記紀に登場する海神(ワタツミ)は朝鮮との交易で活躍する倭国の船頭です。古代は小さな手漕ぎ船や帆船で対馬海峡や玄界灘を渡るのですから、風や潮そして天気を読んで無事に航海させてくれる船頭は海神だったのでしょう。北九州や山陰沿岸や壱岐・対馬などにそういう海神がいたと言われています。そういう場所が海神の宮だったと想定されます。さらに、黄泉比良坂(よもひらさか)があって、高天原は黄泉国とも繋がっています。

黄泉国は異界で海の下にあります。古事記に出てくる出雲にあると言われる根堅州国(ねのかたすくに)が黄泉国といわれます。根の国ともいわれますが、海の下、地中にある世界です。ここ〈黄泉比良坂を使って降りていくことが出来ます。伊邪那岐尊(イザナギノミコト)は亡くなった伊邪那美尊(イザナミノミコト)に会うために黄泉比良坂を通って黄泉国にいる伊邪那美尊を訪れます。この国は死後の世界ですが、伊邪那美尊のように遺体が動き回る世界のようです。黄泉比良坂を通って現世との往還もできるのです。

第二話　三つのパンテオン

松岡正剛氏は著書「世界と日本の見方」の中で、三つのパンテノン（神殿）という表現を使用しています。ローマのパンテオンをもじって、日本には高天原から降りてきた三人の神があり、三つの聖地にパンテノンを作ったのだと述べている。三つの聖地とは、「出雲」、「日向」、「大和」である。高天原から降臨する神は三種の神器を天照大御神から授けられて降臨する。

高天原から最初に降臨した神の地は「出雲」である。高天原での天照大御神（アマテラスオオミカミ）の弟である須佐之男命（スサノオノミコト）は高天原で注乱暴狼藉を働いたことに対して、八百万の神が議論の後、高天原から追放されます。

（注）新嘗祭（にいなめさい）などの神事を行う御殿に糞をまき散らしたり、田の畔を壊し、溝を埋めたりした。

須佐之男命は、最初のパンテオンの出雲国（島根県）斐伊川（ひいがわ）の上流の鳥髪（とりかみ）に降臨する。この斐伊川を上って行くと老夫婦が娘を挟んで泣いているのを見つけます。泣いているその理由を聞くと、この時期、八岐大蛇（やまたのおろち）が現れ、娘を一人ずつさらっていき、今年最後のこの娘がさらわれるという。この娘が櫛名田比売（クシナダヒメ）で、須佐之男命が八岐大蛇に立ち向かって櫛名田比売を助ける物語が「八岐大蛇伝説」です。八岐大蛇を酒に酔わせて退治し、その尾から出てきたのが「草薙の剣（くさなぎのつるぎ）」です。須佐之男命はこの剣を天照大御神へ献上します。現在も天皇継承時の三種の神器のひとつになっている剣です。八岐大蛇が退治された時、伝説では、その血で斐伊川が真っ赤に染まったと言われています。実際に斐伊川の上流は蹈鞴鉄（たたらてつ）の原料の砂鉄の産地であり、この川は酸化鉄で赤く染まっています。そのことから、八岐大蛇は斐伊川そのものを言ったのではないかと言われています。八岐大蛇退治の後、須佐之男命は櫛名田比売（クシナダヒメ）と結ばれ、日本最古と言われる和歌を詠んでいる。「八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を」。その意味は、「ここ出雲に立ち上るのは八重垣のような雲だ。妻と住む宮にも八重垣を作っている　そう八重垣を」という歌である。

須佐之男命の六代目の子が大黒様として知られる大国主神（オオクニヌシノカミ）です。少名毘古那神（スクナヒコノカミ）と共に国造りを行うが、少名毘古那神は途中で常世の国へ去ってしまう。一人になった大国主神が悩んでいると、夢枕に「大物主大神（オオモノヌシノオオカミ）」が現れる。「あなた様はどなたですか？」と聞くと、「私はおまえの幸魂（さちみたま）、奇魂（くしみたま）であり、私を三輪山に祀れば国造りを手伝おう」という。夢のお告げ通りにすると、国造りが完成したと古事記に記されている。国造りが完成すると、高天原からの要求があり「国譲り」が行なわれる。高天原からみれば、葦原中国は高天原が知らす（治める）国であるからである。先の用語の「幸魂」、「奇魂」とは、日本神道でいう「人の心は四つの魂」で出来ているという「一霊四魂」から来ている。一霊四魂とは荒魂（あらみたま）、和魂（にぎみたま）、幸魂、

奇魂で、荒魂は「勇気、荒々しさの神霊」、和魂は「親、親しく交わる神霊」、幸魂は「愛、人を幸せにする神霊」、奇魂は「智、不思議な力で物事を成就する神霊」をいう。大物主大神は大国主神の幸御魂、奇魂ですから、同一の神ということになります。

さて、この大和にある三輪山の話は出雲の勢力が出雲国だけでなく、大和地域も含め全土に広がっていたことを表し、そして新たな大和にできた天照大御神につながる王家が出雲勢力を従えたことを想起させます。次に日向パンテノン伝説をみていきましょう。

二番目の降臨である日向パンテオンは、瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)の天孫降臨で始まる。葦原中国の平定と大国主神からの国譲りが確定したのちに高天原から降臨する。三つのパンテノンの中では最も正統派の降臨になる。高天原で、天照大御神は自分の子の天忍穂耳命(アメノオシホミミノミコト)に降臨を命じるが、瓊瓊杵尊が生まれたばかりなので、こちらの方が降臨には適切と言って譲る。天照大御神の孫が降臨することになったから天孫降臨という。降臨の際に、多くの注随伴神(ずいはんしん)を従えて日向の高千穂の峯に降り立つ。注随伴神には、葦原中国の案内役で猿田毘古神(サルタヒコノカミ)、天の岩戸前で踊った天宇受売神(アメノウズメノカミ)、高天原の知恵者の思金神(オモイカネノカミ)、天照大御神が隠れた天の岩戸を押し開いた天手力男神(アマノテヂカラノオノカミ)等多数である。(注)詳細はコラムを参照

瓊瓊杵尊は降臨して木花之佐久夜毘売(コノハナサクヤヒメ)に一目ぼれして結婚する。瓊瓊杵尊の三代後の子孫が神武東征をおこなうイワレビコ、後の神武天皇である。イワレビコは大和に東征し、大和に橿原宮(かしはらぐう)を造り、大物主大神の娘、伊須気余理比売(イスケヨリヒメ)と結婚する。大和の統治には三輪山(出雲勢力)に協力を得ることが必須であったことが分かる。

三番目の降臨は大和パンテオンです。記紀を読むと、大和へは瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)の兄、天火明命(アメノホアカリノ命)の子孫である饒速日命(以下、ニギハヤヒノ命)が降臨している。神武東征でイワレビコが大和を平定する時に帰順する。ニギハヤヒノ命は降臨したあと、大和の国つ神の長髄彦神(ながすねひこ)の妹、御炊屋姫(みかしやひめ)と結婚し、宇麻志麻遅命(ウマシマジノミコト)をもうける。宇麻志麻遅命は古代の天皇家を支える物部氏の祖と書紀に記述されている。書記に、神武東征を決める前にイワレビコの命が塩土老翁(シオツチノオジ)に相談するくだりがある。イワレビコの東征は塩土老翁に尋ね、翁が「東に美地(うましつち)あり。青山四周(せいざんよもにめぐれり)」と云う。意味は、東方に青い山々に囲まれた美しい土地がある。その中へ天の磐舟に乗ってとび降りた者がある。とび降りた者は饒速日(ニギハヤヒ)というものであろう。そこへ行って都を造るに限る。」と、イワレビコは聞き大和に天津神がいることを知り東征を決意する。

ニギハヤヒ命の降臨時は、大和には元々国つ神として三輪山の神の大物主大神がいた。この神は葦原中国の全ての神を仕切っていたと思われる。ニギハヤヒ命の子孫が存在しているということは降臨時に大きな争いは無く共存しているのであろう。

出雲勢力の存在に関して、書紀に崇神天皇(十代)五年の条に記述がある。

「国内に疫病多きとき、天照大御神と倭大国魂神(ヤマトオオクニタマノカミ)の二神を天皇の御殿に同居させた。しかし、二神の同居には畏れがあり、天照大御神を注笠縫邑(かさぬいむら)に祀った。・・・

大物主大神は大田田根子(オオタタネコ)、倭大国魂神を市磯長尾市(イチシノナガオチ)を祭主にした。」つまり、三輪山の神として一つに統一されていた神を、葦原中国の神である三輪山信仰の大物主大神、そして太陽神としての天照大御神、大和の地主神としての倭大国魂神に、三分割したことが記述される。三神はそれぞれ大神神社、伊勢神宮、大倭神社に祀られている(参照資料 1-3)。(注)笠縫邑とは、三輪山のふもとにある邑で、元伊勢と言われる檜原神社がある。伊勢神宮へはこの邑から二十五か所の変座の後に伊勢に落ち着く。

ニギハヤヒノ命は日向に瓊瓊杵尊(ニニギノ命)が降臨される前に、大和に降臨されているのであるから、大和にはニギハヤヒノ命が王国を既に持っていたことになる。しかし、初代天皇になるイワレビコ尊が神武東征で大和を制し、古代大和王国を開くことになるということはニギハヤヒノ命が大和を完全に掌握できていなかったことを意味する。第十代の崇神天皇まで三輪山の影響があることでそれは理解できる。

参照資料1－3:大神神宮と檜原神社、大倭神社

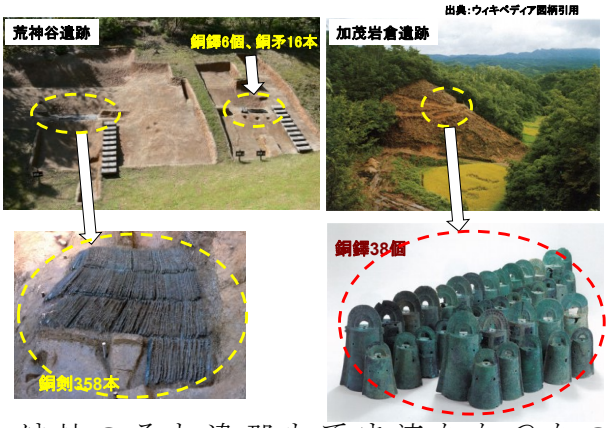
出典:ウィキペディア図柄引用

第三話　出雲伝説

出雲は一九八〇―九〇年代に二つの遺跡、荒神谷（こうじんだに）遺跡と加茂岩倉（かもいわくら）遺跡が発見されるまで、伝説の国であった。この遺跡が発見されてから、北九州、大和に並ぶ第三の文化圏、北九州とは別の発展を遂げた出雲大国の姿が浮かび上がってきた。一世紀中葉に出雲文化は急速に発達し、北九州からの弥生文明が出雲独自の文明に変わる。それは、北九州の初期の稲作を担った集団が用いた遠賀川式土器が出雲で出土するし、一世紀中葉に、北九州の弥生式土器とは異なる出雲独自の口縁端部が凹形の土器、凹線文土器が出土したことで異なった文化圏に変わっていったことが確認された。また、荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡の出土から、出雲は二世紀中葉に全盛期を迎えていたことが証明された。荒神谷遺跡を見てみよう。

参考資料１－４：荒神谷と加茂岩倉遺跡

出典：ウィキペディア図柄引用



一九八四年、荒神谷遺跡からの三五八本の銅剣（中細形銅剣）が発掘された（参照資料 1-4）。この時点までの銅剣の発見数は全国合計でも三百本の発見しかないことを見ると、驚くべき数量であった。今までの古代歴史の大変更が必要になった。草薙の剣から銅剣信仰がこの地には根付いていた。また、この地は御神体となる銅剣を出雲の聖地の仏経山麓（ぶっけいさんろく）に集めた縁結びの祭祀が行なわれた場所と言われている。縁結びの祭器であるから、出雲の地域の豪族の交流が行なわれたのである。それは、出雲風土記に仏経山は神名火山（かんなびやま）と言われ、神の山とあり、出雲のすべての古墳はこの山が見える位置に作られていることが出雲風土記から分かったことから解明された。。

もう一つは、荒神谷の斜面に四列に納められた三五八本の銅剣の数である。意宇郡（おうぐん）の列の銅剣は三十四本、風土記による神社数は六十七社。この数の違いは大和朝廷が出来てから意宇郡に国衙（こくが）が置かれたため、国衙に移動してきた豪族たちが自家で祭る神を分社して作ったため神社が増えたといわれる。それは他の主要郡からの出土を見れば明らかである（参照資料 1-5）。三郡（楯縫（たてぬい）郡、秋鹿（あいか）郡、島根郡）では銅剣百十一本で風土記による神社百十三社。出雲郡は銅剣百二十本で風土記による神社百二十社。神門郡では銅剣九十三本で風土記による神社九十七社である。。出雲の各郡の各首長を

集め、祭祀した場所であることに合点が行く。集めたのは出雲伝説にある大国主神であろうと思われ、伝説から歴史への変換がなされた遺跡である。(注)三郡とは、楯縫郡、秋鹿郡、島根郡の宍道湖の北側に連なる半島にある三郡をいう。もう一つの加茂岩倉遺跡では、一九九六年、遺跡から三八個の銅鐸が発掘された。この遺跡は農道を工事中に偶然発見されたものであるが、荒神谷遺跡に匹敵する衝撃的な事実が明かになった。それは、全国でも一箇所で二四個の出土が最大であったことを考慮しても大きいが、それだけでなく、この遺跡は近くに矢櫃(やびつ)神社跡があり、現在は磐座(いわざ)を残すだけになっているが、磐座を祀るこの土地の首長の所有物と考えるのが妥当と判断された。ということは、この賀茂岩倉のような遺跡が今後発見される可能位は高いということを示したのである(参照資料1-5)。

二世紀中葉の大和朝廷成立前の大和、河内では出雲と同じ鋳型の銅鐸が出土する。銅鐸が壊され三角縁神獣鏡の銅鏡祭祀に移行した纒向遺跡は三世紀である。三輪山信仰が大物主大神を表すことから古代大和が創られる前は出雲の政権があったでのである。

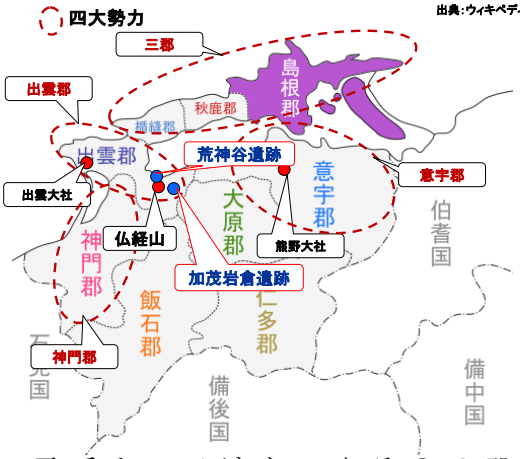
古事記に記されている国譲り神話は大和朝廷が出雲国を従わせた物語であるが、大きな戦争があったことを示す考古学的資料は無い。このことは神話通り、話し合いでの禅譲であろうことを意味している。古事記の記述を読み解いてみよう。

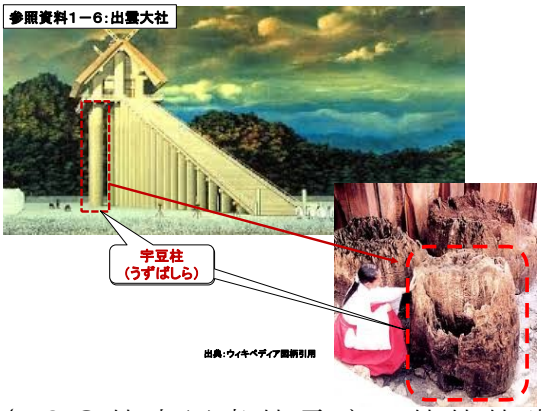
天照大御神は、大国主神によって葦原中国が平定されたことを受けて、建御雷之男神(タテミカヅチノオノカミ)と天鳥船神(アメノトリフネノカミ)を出雲の大国主神に遣わして言う。

「汝がうしはける(領有する)葦原中国(出雲)は我が御子(みこ:天照大御神)の知らす(治める)国である。と任命(命じること)なさった。汝の考えはいかが」と、大国主神は二人の息子が決めることと伝え、息子と相談する。二人の息子とは、事代主神(コトシロヌシノカミ)と建御名方神(タケミナカタノカミ)である。弟の建御名方神が反対し、建御雷之男神と力比べをすることになる。

参照資料1－5 :古代出雲豪族図

出典:ウィキペディア図柄引用





建御雷之男神は、千人がかりで引くほどの大きな岩を指で弄びながら来た建御名方神の手を握りつぶし、たちどころに遠くへ投げ飛ばした。命の危険を感じた建御名方神は、諏訪に逃げ、今後この地から他へは行かないことを誓い、許しを請う。建御名方神は現在の諏訪大社の祭神である。

二人の息子の同意の報告を受けて、大国主神は高天原に届くほどに千木(ちぎ)を高く建てた壮大な宮殿(参照資料 1-6)を造り祀られることを請い、許される。現在の出雲大社である。高天原から天穂日命(アメノホヒノミコト)が降臨し、出雲国造と出雲神社宮司になる。高天原からの降臨であるから出雲国の監視役として派遣されたと考えられる。現在は千家といい、二〇一四年秋に高円宮家の二女・典子女王と、千家国麿氏がご結婚されたのは記憶に新しい。

事代主神(コトシロヌシノカミ)に関しても、出雲に美保神社の「青柴垣(あおしばがき)神事」が残っている。この神事は事代主神が国譲りを迫られ、同意の後、注天逆手(あまのさかて)で船を青柴垣に変えて海の中に姿を消す。青柴垣とは魚とりの仕掛けで入ったら出れない。(注)天逆手とは、呪術(じゅじゅつ)の一つで手の甲で拍手。音がしない。賛意を示さない意思表示と言われる。

出雲の主要なリーダーが総て表舞台から姿を消している。戦わずして姿を消したということは大和での大王家の力が余程強大になっていたと想像できる。

参考図書

＋「世界と日本の見方」　松岡正剛　（春秋社）

＋「古事記」　竹田恒泰　（学研）、「日本書紀」　宇治谷孟（講談社）

＋「古代日本誕生の謎」　武光誠　（PHP）

＋「日本の歴史　本当は何がすごいのか」　田中英道著（扶桑者）

＋「ゼロから知る「古事記」（Gakken）

＋「街道東征」をゆく　神武様の国造り　（産経新聞社）

＋「ヤマトタケルのまほろば」　（産経新聞）

＋『歴史歳時記豆知識』69・氏姓制度』（　ウィキペディア　川村一彦氏）

＋「法隆寺」　法隆寺発行

＋「天平の甍　唐招提寺」　唐招提寺発行

＋「興福寺の仏たち」　金子啓明著　東京美術

おわりに

記紀を読み始める時に戸惑うのは、そこに出てくる神様、后、姫君などの名前の難しさと古事記と日本書紀で異なる名を用いていることです。さらに、系譜の込み入った関係もあります。しかし、古事記と日本書紀の記述事象が符合していることで、異なる神名や系譜に盛り込まれる名称は先達の努力により整合性が取られています。この記紀の整合性の上に立って両書は国史となり、この両書を解釈する様々な専門書が出版されています。記紀を理解するために、そういった専門書をかつようせずに両書のみの解釈の頼っていると古代史の流れが見えなくなります。

本著では著名な本を参考図書として活用し、この専門書を読解することで記紀を読み解いていくことにしました。読み解いていくテーマとしては「古代大和の構築に関わった神々」、「平安時代以降の国風文化の基盤を作った天皇達」の二点を設けました。

「古代大和の構築に関わった神々」では、高天原から天下りした三柱の神の位置づけをまず知らなければならないと思いました。最初の一柱の素戔嗚命は高天原の追放者ですから敵または外様になり、出雲王国を形成しています。二柱目の饒速日命(ニギハヤヒノ命)は高天原から大和への最初に降臨した神ですが、大和を治めきれていないため、イワレビコ命(後の神武天皇)が神武東征によって高天原の正式な天皇として君臨する。饒速日命は物部氏の祖となって古代大和時代から天皇家の家臣となる。

三柱目は本命の瓊瓊杵尊(ニニギノ命)が高天原から降臨し、孫のイワレビコ命によって古代大和が成立することになる。そして、大和を強大な国家へ創り上げていく十代の崇神天皇から、十二代景行天皇・ヤマトタケル。そして外国への影響を持つようになる十五代応神天皇、十六代仁徳天皇から二十一代雄略天皇があり、日本としての基礎文化作りが飛鳥・白鳳・天平時代の聖徳太子、四十代天武天皇、四十五代聖武天皇である。この骨格ができると、この観点に立って、記紀の中で最重要と思われる神と天皇を整理した。まだ不明点は多いが、この背骨を理解することで関係する古代の出来事や神々と天皇が肉付けされていくことが可能になります。

【著者略歴】 井上正和（いのうえまさかず）

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971 年日本 IBM（株）入社し SE 部門に配属。1992 年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。
2001 年に独立し、有限会社　情報戦略モデル研究所を設立。
経営戦略や IT 戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011 年 4 月　神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在、古代史の講座をアイプレスジャパン（株）主催や横浜市地区センター等で学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。

古代史シリーズ2「古事記と日本文化」

発行日　令和3年8月18日　初版発行

著 者　井上 正和

発行所　有限会社 情報戦略モデル研究所
〒226-0006 横浜市緑区白山2－2－E－216
TEL：045-934-7254
URL： http://www.ism-research.com/

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。
お問い合わせ： ism.researchbook@gmail.com